

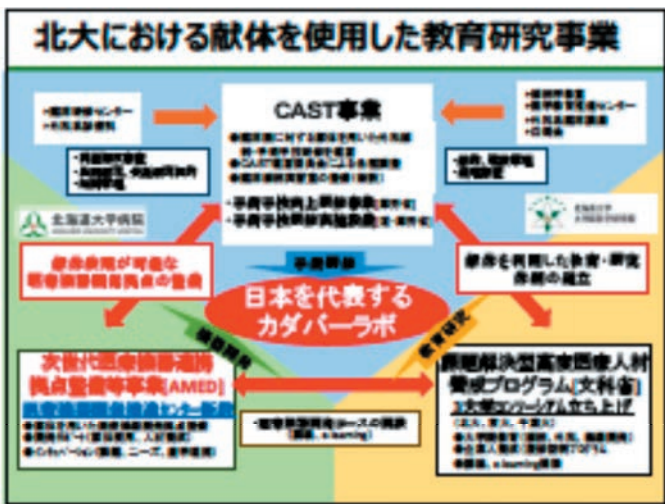
国内初、献体で機器開発へ

北大 臨床解剖実習室を開設 手技研修や人材養成も

北大病院（秋田弘俊院長・94床）と同大医学研究院（吉岡充弘院長）は、献体を用いた臨床医学の教育研究を行う「臨床解剖実習室」（CAST-Lab.）を医歯学総合研究棟1階に開設した。通常の手術室と同等の設備を有し、医師や歯科医師が手術手技研修（CST）を行えるほか、国内唯一の献体を利用した医療機器開発や、献体利用を推進する専門人材養成の拠点として、本格稼働を始めている。

2012年に日本外 献体利用はこれまで進ん 科学会と日本解剖学会 がいなかった。

同大は、16年から「献 体を使用した外科解剖・ ガイドライン」を策定以 手術手技研修事業（C AST事業、実施運営委 降、国内で献体を用いた 員長・平野聡消化器外科 CSTが普及しつつある 学教室II教授）を開始。 一方、臨床医学の教育研 究や医療機器開発等の シール法で固定された生



開設された臨床解剖実習室。手術支援ロボット など、重量の大きい医療機器にも対応できる

体に近い状態の遺体を用 などのCSTを行って い、オンザシミュレー 受講者数は年々増え、 ニングが難しい内視鏡手 術、移植手術、外傷手術 19年は7診療科がプログ

ラムを実施。事業開始以 来、延べ1千人以上が受 講している。しかしこれ まででは学生用の解剖学実 習室を使用しており、実 施内容には制約があった ほか、実施期間も医・歯 学部の実習がない冬季に 限定されていたため、専 用実習室の整備を進めて きた。

新設された実習室には 手術台や内視鏡手術装 置、放射線透視装置など、 手術室と同等の各種医療 機器を完備し、実際の手 術と同様の環境で、ほと んどの手術の研修を通常 で行えるようになった。 CTやMRIも有し、生 前の疾患情報を取得した 上で効率的な実習が可能 だ。同じフロアの解剖学 実習室を併用すれば、1 00人規模の大規模セミ ナーも開催できる。

さらに19年度からは、 CSTに人材育成や医療 機器開発を加えた「CA ST関連事業」を立ち上 げた。同事業は、日本医 療研究開発機構（AMED）の次世代医療機器連 携拠点整備等事業「国内 唯一・カダバーラボで医 療機器開発が可能な拠 点」、文部科学省の課題 解決型高度医療人材養成 プログラム「臨床医学の 献体利用を推進する専門 人材養成」として採択さ れ、包括的に事業を推進 する環境が整った。

医療機器開発では、医 療従事者のニーズと企業 等のシーズを結び付け、 研究開発を総合的にサポ ートする「医療機器開発 推進センター」（センタ ー長・佐藤典宏臨床研究 開発センター教授）を同 大病院に設置。その活動 の一つとして、臨床解剖 実習室の設備を活用し、 これまで国内の大学では 行われていなかった献体 を使用した新たな手術手 技の研究や医療機器開発 を行っていく。

研究実施や白菊会の同 意取得に向けては「臨床 医学の教育及び研究にお ける死体解剖のガイドラ イン」と「人を対象とす る医学系研究に関する倫 理指針」に則った仕組み を構築した。

献体を用いたCSTや 研究開発推進のためには 専門人材育成も急務であ ることから、千葉大、京 大と連携して「献体によ る臨床医学研究プログ ラム協議会」（CCRP） を設置。Eラーニングに よる大学院教育プログラ ムを開講し、▼献体保存 法の選択から臨床解剖の 効率的実施まで、CST を適切にマネジメントで きる人材▼外科教育を医 学研究として行い、英文 論文など具体的アウトカ ムを提示し、エビデンス を構築できる人材▼医工 連携の核となり臨床医学 における献体使用の基盤 を支える人材」を養成し ていく。

CAST関連事業事務 局の七戸俊明消化器外科 学教室II准教授は「臨床 解剖実習室を軸に、献体 を使った医療機器開発と 専門人材養成で、臨床医 学の新たな学習環境を確 立し、高度で安全な医療 が受けられる未来社会の 実現に貢献していく」と 話している。